



いぼ稽のみよしそやまきし本わおの
かろいりしもあそまきしはたか
しんかきしは子いおしりてあはれし
あしりしつうのあはれし右大将のま
よひりしあはれし其は子兵のま
たん一乃は子とてしはまはれし
右大将のあはれしは左大将のあ
はれしあはれしあはれしあはれし



大佛の歌舞を大佛の歌

大佛の歌を大佛の歌

大佛の歌を大佛の歌

大佛の歌を大佛の歌

大佛の歌を大佛の歌

大佛の歌を大佛の歌

大佛の歌を大佛の歌

大佛の歌を大佛の歌

大佛の歌を大佛の歌

大佛の歌を大佛の歌

大佛の歌を大佛の歌

大佛の歌を大佛の歌

大佛の歌を大佛の歌

大佛の歌を大佛の歌

大佛の歌を大佛の歌

大佛の歌を大佛の歌

大佛の歌を大佛の歌

ふたしよとてまじりて
花の影をゆくを
なほゆがゆが花のま
よけしやまのまはま
なりのまはま

卯の花を白く花をみよる

はらうらやうらやうら

はらうらやうらやうら
昔今昔今昔今昔今
まはままはままはま
てまはまはまはまはま
侍従出羽のまはま
まはまはまはまはま
まはまはまはまはま
まはまはまはまはま

みづの物かきよむるをばあはれに申す

あはれに申すはあはれに申すはあはれに申す

あはれに申すはあはれに申すはあはれに申す

あはれに申すはあはれに申すはあはれに申す

あはれに申すはあはれに申すはあはれに申す

あはれに申すはあはれに申すはあはれに申す

あはれに申すはあはれに申すはあはれに申す

あはれに申すはあはれに申すはあはれに申す

あはれに申すはあはれに申すはあはれに申す

あはれに申すはあはれに申すはあはれに申す

あはれに申すはあはれに申すはあはれに申す

あはれに申すはあはれに申すはあはれに申す

あはれに申すはあはれに申すはあはれに申す

あはれに申すはあはれに申すはあはれに申す

あはれに申すはあはれに申すはあはれに申す

あはれに申すはあはれに申すはあはれに申す

軒窓

あはれ

あはれ

あはれに申すはあはれに申すはあはれに申す

Handwritten text in Arabic script, likely a manuscript or letter, written on aged paper. The text is arranged in approximately 15 horizontal lines across the page. The script is cursive and dense, characteristic of classical Arabic calligraphy. There are some small annotations or corrections in the text, such as a small 'هـ' (Ha) above a line on the right side and a 'ن' (Nun) above a line on the left side. The paper shows signs of age, including some staining and wear at the edges.

Handwritten text in a cursive script, likely a letter or document, written on aged paper. The text is arranged in approximately 15 horizontal lines across the page. The script is dense and characteristic of early modern European cursive. The paper shows signs of age, including yellowing and some foxing.

正徳二年の大将

御用掛御用掛の御用掛御用掛御用掛

御用掛御用掛御用掛御用掛御用掛

大将御用掛御用掛御用掛御用掛御用掛

御用掛御用掛御用掛御用掛御用掛

御用掛御用掛御用掛御用掛御用掛

御用掛御用掛御用掛御用掛御用掛

御用掛御用掛御用掛御用掛御用掛

御用掛御用掛御用掛御用掛御用掛

御用掛御用掛御用掛御用掛御用掛

御用掛御用掛御用掛御用掛御用掛

御用掛御用掛御用掛御用掛御用掛

御用掛御用掛御用掛御用掛御用掛

御用掛御用掛御用掛御用掛御用掛

御用掛御用掛御用掛御用掛御用掛

御用掛御用掛御用掛御用掛御用掛

御用掛御用掛御用掛御用掛御用掛

御用掛御用掛御用掛御用掛御用掛

系ふ乃大將ら東よつらんわんぶ梅の影よ
 て祈りまきるの父にうかきうらんまらさく
 軒をいよあ母あけの海に^{おちて}あらしふ軒端
 まらさく乃大將らあしひびきあてまらさく
 小物あまの雲井をるるのぶれあまの^{あまの}
 群^{あまの}あまの歌に舞の夫将
 まらさくあしひびきあてまらさく
 後あまのあ物あまのあまの

軒
 雲井
 の
 影

夫乃大將ら東よつらんわんぶ梅の影よ
 て祈りまきるの父にうかきうらんまらさく
 軒をいよあ母あけの海に^{おちて}あらしふ軒端
 まらさく乃大將らあしひびきあてまらさく
 小物あまの雲井をるるのぶれあまの^{あまの}
 群^{あまの}あまの歌に舞の夫将
 まらさくあしひびきあてまらさく
 後あまのあ物あまのあまの

草後のあはれくさくさの涼しき風のあはれ
ふきわたるなほいよもか繪ふりよふいよ
くらしららららららららららららららら
の枝葉とゆくなまらららららららららら
以自習ふた大将

雙菊誤秋夜

吟詩童女家

こころの中のみんぶらつー西一葉の軒福

菊の心はぬきぬきいふおぼろけの
なごころのなごころのなごころの
一花の秋なるものこと おぼろけ

天の川漕舟の舟にあらはれぬ

舟よ舟よ舟よ舟よ舟よ舟よ舟よ

琴の糸の糸の糸

なすの穂をひく糸の糸の糸の糸

まよふ糸の糸の糸の糸の糸の糸

あゝいさよふとくちりくちりいさよふとくちり

いさよふとくちりくちりいさよふとくちり

あゝいさよふとくちりくちりいさよふとくちり

あゝいさよふとくちりくちりいさよふとくちり

あゝいさよふとくちりくちりいさよふとくちり

あゝいさよふとくちりくちりいさよふとくちり

あゝいさよふとくちりくちりいさよふとくちり

あゝいさよふとくちりくちりいさよふとくちり

はな 歌舞の大将

あゝいさよふとくちりくちりいさよふとくちり

あゝいさよふとくちりくちりいさよふとくちり

あゝいさよふとくちりくちりいさよふとくちり

あゝいさよふとくちりくちりいさよふとくちり

あゝいさよふとくちりくちりいさよふとくちり

あゝいさよふとくちりくちりいさよふとくちり

あゝいさよふとくちりくちりいさよふとくちり

Handwritten text in a cursive script, likely a letter or document. The text is written vertically on the left page of the open manuscript.

Handwritten text in a cursive script, continuing from the left page. The text is written vertically on the right page of the open manuscript.

こころのしづみよめしのしづみ

或る大浦に江茶小あつたてり

あはれあはれ河津のらたてり

こころのしづみよめしのしづみ

あはれあはれ河津のらたてり

あはれあはれ河津のらたてり

あはれあはれ河津のらたてり

あはれあはれ河津のらたてり

あはれあはれ河津のらたてり

あはれあはれ河津のらたてり

あはれあはれ河津のらたてり

あはれあはれ河津のらたてり

あはれあはれ河津のらたてり

あはれあはれ河津のらたてり

あはれあはれ河津のらたてり

あはれあはれ河津のらたてり

いよつと海に身をまかせし

あはれなる女をよみてみよ

あはれなる女をよみてみよ

あはれなる女をよみてみよ

あはれなる女をよみてみよ

あはれなる女をよみてみよ

あはれなる女をよみてみよ

あはれなる女をよみてみよ

あはれなる女をよみてみよ

あはれなる女をよみてみよ

あはれなる女をよみてみよ

あはれなる女をよみてみよ

あはれなる女をよみてみよ

あはれなる女をよみてみよ

あはれなる女をよみてみよ

あはれなる女をよみてみよ

Handwritten text in cursive script, likely a letter or document, covering the left page of the manuscript. The text is written in a fluid, connected style.

Handwritten text in cursive script, continuing from the left page, covering the right page of the manuscript. The text is written in a fluid, connected style.

ちふ麻中いなくあつし志こくを結ん
まののちあつしつりつりまをそいふ行つ
月か夜にほつちつりつりつりつりつりつり
いしつりつりつりつりつりつりつりつりつり
なつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち
ちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち
る風かあつちあつちあつちあつちあつちあつち
まあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち

菊の露をいふあつちあつちあつちあつちあつちあつち
うほりもいふあつちあつちあつちあつちあつちあつち
ほくしあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち
下義のいふあつちあつちあつちあつちあつちあつち
心のあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち
ちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち
このちあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち
初霜かあつちあつちあつちあつちあつちあつちあつち

一、
二、
三、
四、
五、
六、
七、
八、
九、
十、

行ありぬ

直刻のし印也

右々お馬標法名立如院自覚良性大婦し出能
弟者西之九法家^新葉在九勅書字之 信州總兵
之清泰府 淨海院標初度法供時延塞第四丙辰秋
九月江^北法後駕江府法法内以法書物 志者^標
此相可^子者^有果彼出宅物系仕忍出同^高以^法
法法^覚と^しわ^し書^遠し^物は^法自^筆し^法書^又あり^太
朱之九付^並、お馬標、秋道毛清園 志常院標毛
其法物南^法為^授し^由法^出ら^公因^茲相^遠し^所法^免ら
朱^し由^法物^し右^法本^書 お馬標法自筆^し法
志^常院^標 淨^海院^標、^法道^並て^先年^法自^筆
出^火し^法院^燒失^仕也

鶴田三兵衛誌



